博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	金　小英
論　文　題　目	平安時代中期までの和文における笑い――『源氏物語』を中心に――

審査要旨

本論文は、平安時代前期から中期までの和文（特に散文作品）における笑いがいかなるものかということを論じている。その研究対象の中心は『源氏物語』であるが、『源氏物語』以前、すなわち平安中期までの和文における笑いがいかに展開しているのか、ということもあわせて論じられている。全三篇、計八章からなり、全体の分量は四〇〇字詰原稿用紙換算で六〇〇枚強である。まずは、その論文の内容と特質を整理する。

「第一篇　平安前期の和文における笑いの諸相」では、特に西欧の多様な「笑い」論を整理しつつ、それらを平安前期和文の笑いの分析に援用することで、平安文学研究におけるこれまでの議論を相対化し、かつ新たな見方を示している。**「第一章　「笑い」論の展開と文学における笑いの領域」**（副題略す、以下同）は、本論文の基礎論に相当するものであるが、プラトンなどの西欧古典から近代以降の優越理論、不調和理論、解放理論、さらにはベルクソン、フロイト等々の論などもふまえて、文学における笑いの領域を見定めようとしている。さらに後半では、和文の具体例を挙げながら、「滑稽」「諧謔」「機知」「諷刺」「皮肉・反語」「パロディ」といった範疇に分けて平安時代の和文における笑いの領域をとらえている。つづく**「第二章　『土佐日記』の方法としての笑い」**は、笑いに関わる表現が多くみられる『土佐日記』を対象とする。これまでにも『土佐日記』における諧謔的な表現はたびたびとりあげられてきたが、個別の表現に特化して論じられる傾向がつよかったため、『土佐日記』における笑いの全体像の把握は充分ではなかった。ここでは便宜的に「機知的言葉遊び」「揶揄・諷刺」「滑稽・諧謔」の三つに分け、第一章の基礎論に照らしながら『土佐日記』の笑いの方法が西欧古典以来の「笑い」論に照らしてみてもきわめてレンジの広いものであることを明確に示している。あわせて、仮名日記という形式ならびに非日常空間の設定と、笑いの方法との相関関係についてもとらえている。

次の**「第二篇　平安中期までの「人笑へ」言説」**は、特に他者に対する恥の意識をあらわす「人笑へ」（また「人笑はれ」もふくむ）に関する研究である。平安中期にいたるまで用例数がきわめて少なかったこの言葉は、『源氏物語』で飛躍的に多く用いられるようになり、しかも物語の鍵語と見なされるほど重要な意味をになうようになる。よって『源氏物語』の「人笑へ」論は既に多くあるのだが、**「第三章『竹取物語』における「人笑へ」言説」**では、あえて用例がまったくない『竹取物語』の貴公子五人の求婚譚末尾に着目し、『源氏物語』の「人笑へ」の特徴から逆照射することで、『竹取物語』においても恥意識を基調とした「人笑へ」に相当する言説が見いだされるということを論じる。さらに**「第四章　平安中期までの「人笑へ」のありよう」**では、『源氏物語』までの「人笑へ」の用例を逐一検討している。『源氏物語』の「人笑へ」については「倫理的な規矩」（鈴木日出男）とまで評されているが、それ以前ではさほどの制御力を持っているわけではなく『源氏物語』において深化・拡充されていること、しかし一方で『源氏物語』の「人笑へ」は『竹取物語』の求婚譚を貫く思考と軌を一にしているということを主張している。

四つの章からなる**「第三篇　『源氏物語』の諧謔性と笑い」**は、『源氏物語』に関する笑い論である。**「第五章　頭中将と光源氏」**は「雨夜の品定め」の寓意性をとらえながら、頭中将の人物像の変貌を指摘してきた過去の議論を批判する、画期的な頭中将論といえる。**「第六章　『源氏物語』における「女」と「仏」」**は、さまざまな平安時代の文学作品において人を「仏」になぞらえる場合、ほとんどが男性（しかも尊い法師など）に限られるのに対して、『源氏物語』では女性と「仏」を重ねるという珍しい表現が散見され

氏名　金 小英

ることに着目し、そこに諧謔性があらわされ、さらには「仏」の権威を無化するような効果がみられることを明らかにした。**「第七章 玉鬘十帖の笑い」**では、玉鬘をめぐる物語の前半部で活躍する大夫監、豊後介、女房三条らの鄙性、無知、頑固さ等々の笑いをもたらす面が、玉鬘の美質の背後にひそむ一面へと通じてゆくことを論じている。鄙の地で生育した玉鬘のもつ負性のみならず、その「わららか」な性格の由来をも明らかにしている。**「第八章 男女関係に用いられる「たはぶれ」の一考察」**では、これまで「たはぶれ」という言葉の大半が「遊び興じること」もしくは「冗談」などと解されてきたことに疑問を呈し、かなり多くの用例が男女の（みだらな）関わりをあらわしていると解すべきことを実証すべく、多数の用例をとりあげて詳しく検討している。

以上のように整理してみたが、本論文は次の三つの点において特に価値を有しているだろう。

・笑いに関する表現が個別に検討され、論じられることは多くあったが、平安時代文学の笑いについて、西欧の「笑い」論の展開をおさえ、それに照らしながら包括的な検討がなされることはなかった。本論文は平安時代中期までの主要作品全般におよぶものではないので、まだ包括的とはいいがたいが、そのような検討を試みた論として評価されるべきであろう。

・第二篇の「人笑へ」論は、用例のない『竹取物語』の中から「人笑へ」に相当する言説を読みとるという方法で、『竹取物語』から『源氏物語』にいたる物語文学史をとらえ直す視座を示した。

・第三篇の論考では、特に「雨夜の品定め」の意義、玉鬘物語の方法など、従来もたびたび論じられてきた問題をとりあげながら、これまでの議論を更新する新見を示し得ている。

なお、これらのうち一点目と二点目については、論文提出者がダブル・ディグリー・プログラムによりコロンビア大学に留学して、「笑い」論をふくむさまざまな思想、文学理論などを集中的に学ぶとともに、日本におけるオーソドックスな古典文学研究を相対化するような方法を体得した成果といえるだろう。

ただし、公開審査会では注文も出された。まず、和文とはそもそも何か、という視座からの議論を要するのではないかという指摘である。これは、とりあげられている笑いの表現が、いったい誰のために書かれたのか、もしくは誰が実際にそれを読むのかという問題に関わる大きな問題であり、またジェンダーに直結してくる問題でもある。今後は意識的にとりくむ必要があろう。さらに、それともつながる問題として、漢文日記と仮名日記とのかかわりも重要であるが、本論文ではそのような対比と検討は不充分といわざるをえない。一方、第四章の「人笑へ」、第八章の「たはぶれ」の検討については、多数の用例をとりあげてはいるものの、現時点での考察が充分に熟していないことは否めないだろう。

このように、今後のさらなる深化、あるいはよりひろがりのある考察が期待される部分がのこっているのだが、総じて、平安前期から『源氏物語』にいたるまでの和文における笑いについて新たな見解を提示していると認められることから、本論文を課程による博士学位論文にふさわしいものと判断した。

公開審査会開催日	2014 年 1 月 17 日		
審査委員資格	所属機関名称･資格	博士学位名称	氏 名
主任審査委員	早稲田大学 文学学術院･教授	博士(文学) 早稲田大学	陣野 英則
審査委員	早稲田大学 文学学術院･教授		兼築 信行
審査委員	早稲田大学 教育･総合科学学術院･教授	博士(文学) 早稲田大学	福家 俊幸
審査委員			
審査委員			